

深草正博 著 「文化と環境」の教育論

荒井正雄

一 「問い」としての教育論

ゴーギャンの有名な絵画「我々はどこから来たのか。我々は何者なのか。我々はどこへ行くのか」は、哲学の根本命題である「問い」（問題設定）を題材とし、人間の一生を描いたものとは解釈できるのだが、「我々は何者なのか」との問いに答えるのは簡単ではない。併しこの「人間とは何か」と言う「問い」に、自分なりの答えを出すように努力をすることが、一回性である人生の生きた証（testimony）になるのではあるまいか。

論評者は、嘗て著者の労作『社会科教育の国際化課題』（国書刊行会）の読後感を、『問題提起』（疑念）を核心とする書である」と認めたことがあった（皇學館大学人文學會『皇學館論叢』第二十八卷第五号、平成七年）。この感想は、『環境世界史序説』

（国書刊行会）を読んだときにも同様であった（書評―『皇學館論叢』第三十五卷第一号、平成十四年）。つまり著者は、人間の生き方に関わる「問い」の重要性を説き、文化、歴史及び教育等の諸問題を通して探索すべき学問の根本テーゼであるとしているのである。本書は、小論を纏めた「教育論」集であるが、前二著と同様「問い」を重視した論文によって構成されている。本書は、二部構成になっているのだが、論文の内容からすれば、文化、歴史、教育の問題が中心論題となっている。人間の生活に深く関わる環境の問題は、歴史的な国際環境（背景）のことだけではなく、「気候も世界を（論評者補足―時間的・空間的に）つなぐ重要な」環境、文化の問題であるとした、著者独自のセオリーを提唱している（「まえがき」四頁）。例えば、著者の専門領域であるヨーロッパ史に関わる「十七世紀の危機」の問題

が、それである。著者は、当初「その原因を経済的なものを中心に考えていたが、最近では『小氷期』ともいわれるその気候に考察の比重を移している」(「まえがき」四頁。第一部『歴史の方法と課題』の「森林破壊の歴史と現代への教訓」や「気候から読み解く世界史」なども同様な発想である。)と言う。著者の学問に対する姿勢——「学問上の『達成』はつねに新しい『問題提起』(マックス・ヴェーバー『職業としての学問』)にあるとしたセオリーがよく現れている。

個々の魅惑的な論文についてのコメントはおこなわず、著者が、「あとがき」で言及している本書のキー・ワード、即ち「タテの異文化」と「ヨコの異文化」に関わる歴史理論と、「環境」問題に限定して論じてみたい。何故ならこのキーワードこそが、著者の文化・教育哲学であり、方法論上での基本概念であるからである。

二 「タテ」(時間的)と「ヨコ」(空間的)の

歴史観と文化論

近・現代は、進歩を中核とした文明一元観によって世界を解釈する「錯覚の世紀」(森本哲郎)である。「日本の場合、その“錯覚”の路線を敷いたのは、明治の初めの福沢諭吉の思想であった」(本書「地球人類史への展望」一二頁。同様に竹内好は、「歴

史は未開から文明への一方交通」とする文明一元史観の我が国「最大のイデオログ」が、福沢諭吉であった、と指摘(『日本とアジア』「近代日本思想史講座」8、筑摩書房)と著者は、指摘し、「福沢とは正反対のマイナスの評価を」西洋近代化に対しておこなった人物が、夏目漱石であったという一説を定立している。著者は、『我輩は猫である』から自説を論証する文章(岩波文庫、三三六頁)を引用して彼が「環境破壊こそがヨーロッパの『進歩』の本質だと見抜いて」いた、と読み取っているのである(一四頁)。その上で、「論吉的な価値観でずっと進んできた日本人は、早急に漱石的な方向に世界観を転換しなければならぬ」と提言する(一五頁)。著者は、学問(教育)における——通説のみに固執する態度を改め——「発想の転換」の重要性を説いているのである。ここには、一八世紀西欧の思想的風土で構築されてきた進歩史観の独断的優越性——例えば『百科全書』の項目(『日本』の「結論」では、「東方諸民族は……いまだに野蛮人、あるいは子どもにすぎない」と記載されており、「日本文化の紹介を媒介とした、ヨーロッパ文化の優越性とその賛美のうちに終わっている」という(中川久定『啓蒙の世紀の光のもとで』岩波書店)ことに象徴される——と普遍性——啓蒙主義歴史観による民族、国家の独自性を越えたコスモポリタンの思想——に対する、著者の疑念が、存在している。それを乗り越える理論(超近代のセオリー)が「文化相対主

義」であると著者は、強調する。

本書に依れば、著者の相対主義的歴史観を構築するための理論的背景となったのが、松井孝典（東京大学教授・宇宙学）の提唱する宇宙史観であり、黒川紀章（近代建築）の「共生」思想であった（本書一五頁）。松井の宇宙史的観点から言えば、人類史の発展方向は、人間圏の「分化」（「文明とはユニット〈集団〉化」）であって、分化論的には、多様化である。松井は、自ら「分化」論について次のように言明している。

文化や宗教や価値観なども多様化であった方がよい。そもそもそれぞれの風土でそれぞれの文明が発展し、地球上の異なる風土が数多くあるが故にこれだけ多くの文明が誕生したのである。これからの方向性はそれぞれをどううまくつなげて、全体としての調和をつくるかにある。統合とはそのような方向性であってすべてを同じにすることではない（二二世紀問題群ブックス『地球倫理へ』岩波書店）。

右の文節文を見る限り松井の所論である人類史の「分化」の方向は、著者の持論である「タテ」の異文化論に、「多様性」は、「ヨコ」の異文化論に相当すると考えられる。

丸山真男は、「ヨーロッパは近世民族国家が生成する前にすでに一つの普遍主義（引用者補足ローマ・カトリック教会と神聖ローマ帝国に象徴されるヨーロッパ共同の理念）をもっていた」と

した上で、「ルネッサンスと宗教改革にはじまる近世民族国家の発展は、この本来一なる世界の内部における多元的分裂にはかならなかつた」（『現代政治の思想と行動』上巻、未来社）と説明する。この言説は、ヨーロッパは一つであつたから多元的に分裂しても文明的には同一・同質と読めるが、「分化↓多元化」の方向性は、松井の宇宙発展史に近似した歴史観といえるのであるまいか。丸山真男が、認知していたかは不明だが、西田幾多郎は、「近世ヨーロッパに於いては、種々の個性を有つた強大な国家が発達し、現に相対し相争ひ居ると云ふ」が、「併しそれはヨーロッパが近世に入つてから一つの世界でなくなつたと云ふことでない」。「近代のヨーロッパに至つて、諸の国々が真に一つの世界に於ての主体的なるものとして対立し」ているのであって「色々の国家が主体的としてそれぞれの時代を担つた」ということである、といっている（『西田幾多郎全集』第十二巻）。ともあれ著者の主張は、世界に諸国が並存している現代では各国に独立性（主体的なるもの）があり、従つて「ヨコの異文化」の時代である、というセオリーである。

著者に影響を与えたもう一人——黒川紀章の「共生」論理は、著者の説明によれば、仏教の「ともいき」と生物学の「棲棲」（今西錦司理論の「棲み分け」と同じか？）の思想を採り入れた概念のことである（本書一七頁）のだが、それは、精神史の流れからすれば、日本文化の特徴である「あいまいさ」の系譜

に属する。両者の論理を文明史の問題として捉えた場合、文化の「分化」説（松井説）は、著者の文化的テーゼである「タテの異文化」（時系列的・歴史的異文化）の問題に、黒川の「共生」説と松井の「多様化」説は、「ヨコの異文化」（空間的な同時存在的・地理的異文化（本書一〇七頁））の問題である。従って著者の教育・文化哲学である「文化相対主義」は、「タテ」（時間性 zeitlichkeit）と「ヨコ」（空間性 räumlichkeit）の二つのモメントによって相互補完的に理論化されることになる。

ところで著者の文化史観——「タテとヨコの異文化」論とその「共存」を提唱する論説は、西田哲学の「主体即環境、環境即主体」のロジックに似た論理的側面を持っているように思われる。西田幾多郎の、次の論説が、それである。

一つの世界が成立するには、それぞれの環境に応じて主体的なるものがなければならない。併し世界は矛盾的自己同一として何処までも作られたものから作るものへと動いて行くのである。蘇我氏藤原氏以来我国歴史に於て主体的なるものは、それぞれの時代に於てそれぞれの時代の担い手の役割を演じたのであらう。併し作られて作るものとして、如何なる主体ももはや環境に適應しない、即ち社会形態が行詰る時が来なければならない。歴史が生きたものであるかぎり、然らざるを得ない。支那ではかかる場合が易姓革命となつた。我国

ではそれがいつも皇室に返ると云ふことであつた。……そしてそれはいつも昔の制度文物に返ると云ふことでなく、逆に新たな世界へ歩みだすと云ふことであつた。明治維新と云ふ如きものが最も之を明にして居ると思ふ（『西田幾多郎全集』第十二巻）。

「主体的なるもの」（歴史的個人・歴史的集団）が、それぞれの時代精神として歴史を担うのだが、主体的なるものは、自ら作った環境（社会形態）の行き詰まりによって滅び行く運命をもつ、が、「そこに各時代の絶対性がある」（『西田幾多郎全集』第十二巻）のである。従つて新たな環境（時代、社会）は、新たな時代精神（主体的なるもの）によって形成されるのであつて、先行する環境（時代）とは非連続である。著者が強調する「タテの異文化」論と重なる論理性が認められるように思う。

西田が言う「皇室」は、「主体的なるもの」を包摂する矛盾的自己同一としての「場所」のことであるのだが、このことによってそれぞれの時代が独自性（時代精神）を保持しながら日本の歴史全体（タテ・時間性）を形成するのである（皇室に帰る）。西田は、これを「非連続の連続」（矛盾的自己同一的）といつてゐる。著者の「タテの異文化」論は、「連続」の論理に言及していないが、これに近似するロジックが、「リズム観」（本書一二七頁。この点に付いては、『社会科教育の国際化課題』の「書評」で

指摘したことがある。「皇學館論叢」第二十八卷第五号。〕である様に思う。従って「タテの異文化」論と「リズムム観」を総合的に論説する必要（課題）があるのではないか、——論評者の感想である。

松井孝典は、文明の分化（タテ＝時間性）と多様性（ヨコ＝空間性）を論説した上で、現実世界において空間的に並列する文化を「調和」する方向の重要性を示唆する。他方黒川紀章は、「ヨコの異文化」の「共生」（日本文化の特徴＝あいまいさ）を提唱する（ただ、タテの異文化＝時間性の問題に言及していない）。ここで西田の文化論——「個別性と世界性」論を『日本文化の問題』によって確認しておきたい。西田は、こう論述している。

今日はいずれの国も、世界から離れて単に孤立的にそれ自身としては立てない。……これまでは諸々の国々は、世界に於て横に並んでいた。世界は空間的であった。今は世界は縦の世界となった、時間的となった。今日の世界は抽象的に考へられるのではなく、具体的である（『西田幾多郎全集』第十二巻）。

西田哲学の根本原理である「矛盾的自己同一」の論理が、国家論のロジックとして適用されているのである。空間的に「並存」する個別的国家（「ヨコ」の主権国家）が、今日（二十世紀の世界）ではその独自性を保持したまま世界的世界に包摂される

世界主義の時代であること（時間的に具体的な「一」＝世界となること）を、西田は、論じているのである。具体的に言えば諸国家が独自性（主権国家）を保持したまま「地域的世界」（例えばEU）に包摂されていくことを意味している。西田哲学の「現代性」が、ここから見えてくる。

西田の右の文節を踏まえて言えば、著者が、「多文化・多様化の世界の中で共生するためにせひとも必要な資質は、二つの方向性（自文化の相対化＝価値の独自性と他文化との同等性＝文化尊重）を同時・並行的にもつことである」（括弧内、引用者。本書四〇頁）と強調するのは、「各国家が益々強固となつて各自の特徴を發揮し、世界の歴史に貢献する」「真正の世界主義」（『西田幾多郎全集』第十巻）を論説する西田哲学の論理性にかなり近いことを言っているのではあるまいか、——と論評者には、思えるのである。その意味で著者が提唱する文化相対主義は、単に自己の価値のみを絶対視するものではなく、他者の価値を容認し、その上で文化の全体性（包摂）を説く論理構造となっている。

問題は、歴史の方向性を決定するのは、誰（歴史的個人であるにせよ、歴史的集団であるにせよ）であるのか。論評者が、歴史の方向性を決定付けるキー・パーソン（市井三郎『哲学的分析』岩波書店）に拘るのは、西田の歴史哲学の論説に真理を観るか

らである。西田は、自らの歴史観を次のように論じている。

歴史の内容は歴史自身の中から理解せられるべきであって、歴史の外から理解せられるべきでない。歴史的内容が外から法則的に理解せられるに従って、歴史は歴史性を失って自然に近づく、……歴史を理解するには、……自覚的なるものを置いて理解すべきである……〔西田幾多郎全集〕第五卷。

「自覚的なるもの」とは、真の自己が歴史を認識し、判断して世界を形成する矛盾的自己同一（作られたものから作るもの）のことであるが、真の自己は、「歴史の中に居る」創造的な自己のことである（西田の三宅剛一宛書簡、昭和一九年七月三一日）。歴史は、人が作るものであるが、それは、独自性（個別性）を持った各時代を自覚的に統一（個別性を包摂した全体性、個別即全体）することである（非連続の連続）。この自覚する個人が、キー・パーソンである（国家のあるべき姿「国の形」の設計者）。

ところで激動の昭和前期（昭和一〇年代）日本の国家を方向付けたキー・パーソン（軍部特に陸軍統制派、偏狭的国粹主義者）は、西田が提唱した世界主義の哲学（主権国家を包摂した世界主義の哲学）を持たなかった（拙稿「西田書翰に見る日本の精神史」『哲学と教育』第五三号）。従って各国家の独自性を認めながら、各国家を包摂した世界主義に立つような、自国の方向性を決定

深草正博 著「文化と環境」の教育論（荒井）

付けるキー・パーソンの出現が、必要であった、——西田が『日本文化の問題』や「国家理由の問題」で論説した国家論の根本精神は、ここにあったのである（拙著『西田哲学読解——ヘーゲル解釈と国家論——』晃洋書房）。「分化することは多様化する」とだ」と規定する松井孝典が、分化する方向性を「うまくつなげて、全体としての調和をつくる」べきだとする地球史観も「調和」し「統合」するキー・パーソンが重要な役割を果たすことになり、西田と同じ地平に立つ哲学のように思う。

三 歴史に刻まれた環境問題

——進歩主義の「影」について

著者は、環境世界史を提唱する（梅棹忠夫理論「文明の生態史観」と川勝平太理論「文明の海洋史観」の総合化）。それは、「今日の環境問題と同質の問題（たとえば森林破壊）を探索して、現代の課題にいか」すためであり、他方「かつて人々がどのような環境（とくに気候をも含めた生態的条件）の下で、生活・活動したか」（「我々は何者か」の問い）を、グローバル世界史の問題として展開するものである。一二世紀頃のヨーロッパは、「中世温暖期」であったことから田畑が開墾され人口も増加したが、「森林が大量に破壊され」た。一四世紀に気候が寒冷化し、「大地が人口を支える許容量」を越えたため、病気の蔓延に拍車を

かけた。ベストの流行がそれである。中国の「紅巾の乱」も氣候変動を契機にしている、と著者は、言う。このことは、人間の生活と氣候の関係から「人間とはなにか」を問うことである（本書一一九—一二〇頁）。環境と人間についての思想的、文化的価値に関わる問題である。

著者が構想する環境世界史の「環境破壊」に深く関わる「森の開拓」について、山下正男（京都大人文研助教授、哲学）は、文明的観点から次のような説明を加えている。

英語で森の開拓のことを *clearing* という。これは文字どおり真っ暗であったところを明るくするという意味がある。

ところで古代ヨーロッパにおける森林の開墾の度合いは、ローマ帝国の最盛期において最高潮に達した。併しその後、ローマ帝国が分裂し衰退するにつれてまた森が復活してくる。そしてそれがヨーロッパにおける中世時代であった。中世という時代はふつう暗黒時代 (*dark age*) といわれるが、それは文字どおりうす暗い森におおわれていた時代であった。ところでこの暗黒時代は明るい近世という時代にとって代わられるが、この時代はまさしく前時代の暗さを否定する啓蒙時代、つまり文字どおり「くらさをひらく」時代であった。そして英語の *enlightenment* (啓蒙つまり明らかにする)、ドイツ語の *Aufklärung* (明々々々) フランス語の *eclaircissement*

(明るくする) といったことばにも、実は森を伐り開き世界を明るくするという意味がこめられているのである (『植物と哲学』中公新書)。

大変示唆的な説明である。暗黒の中世時代を否定して明るい光に包まれた啓蒙時代に移行する歴史の方向性を進歩とすることは、中世を後れた時代と捉える「啓蒙的偏見」であると、著者は、言う (本書『啓蒙的偏見』を捨てる「二六二頁）。進歩主義に対する著者の疑念が、ここにも現れている。ルソー (J. J. Rousseau) は、「人間を文明化し、人類を墮落させた」のは鉄と麦であるという (『人間不平等起源論』)。暗黒を切り開いていく「知」は明るい近世・近代を構築する「力」と思考されたが (F. Bacon 「知は力なり *Knowledge is power*」) 自然を支配する知識『新オルガノン』)、「知」を駆使した技術「力」(鉄)の発展(文明化)は、自然(森林・植物)を人間欲望の対象・手段と考えるようになり(人間中心主義)、結果として自然破壊、環境破壊をもたらすことになった(鈴木大拙は、環境破壊の思想的根拠をユダヤ・キリスト教の伝統に求めて、聖書に現れた人間優位の思想が、自然の征服、自然の冒険にまで至りついたという『植物と哲学』)。即ち森が明るくなる(文明化)ことは、森が死する(破壊)ことであった。著者が、問題とする自然(森林)破壊の、日本における史的事実例としては、タタラ製鉄による森林(自然)破壊がある。タタ

ラ製鉄は、鉄の流通（文明化）が進むにつれて北上山地と中国山地に集中するようになった。中国山地の中心地は山陰側であったが、『出雲国風土記』（「飯石の郡」「仁多の郡」）によれば「堅くてさまざまな器具を造るのにもっとも適している鉄」「まさ砂鉄」が豊富であったとある（吉野裕訳『風土記』平凡社）。山陰側にタタラ製鉄が盛んになった原因としては、「砂鉄を採取する鉄穴（かんな）流しに使われる用水が寡（すく）雨地の山陽側より豊富」であったことに求めたれるという（市川健夫・齋藤功『再考 日本の森林文化』NHKブックス）。『古事記』「八俣大蛇神話」には、ササノオがヤマタノオロチを「十拳劔」で「切散し」たため「肥川血に変わり而流れぬ」とあるが、これは、鉄穴流しで赤く濁った斐伊川（緋川）のことだとする解釈がある。ところで「鑪（furnace）」は、森林資源とくに広葉樹資源に依存」しており、タタラ製鉄に使用される「木炭」の生産のために、中国山地では年間一万二千町歩の山林が伐採されたと、推定されており、従って山陰側でタタラ製鉄が盛んとなったもう一つの原因が、中国山地における山陽側の、森林資源の枯渇（森林破壊）にあった、という（市川健夫・齋藤功『再考 日本の森林文化』）。森林資源の枯渇の原因があるとすれば、著者が強調するように、タタラ製鉄（技術Ⅱ知）による日本社会の文明化（進歩）が、自然破壊の元凶（「負」の遺産）であった事実を物語っているように思う。

ところで西洋文明の受容によって開始する日本の近・現代史を通観する時、四回の歴史的環境の破壊（第一回の破壊の波は、

深草正博 著 「文化と環境」の教育論（荒井）

明治維新直後、第二回は、明治末期から大正時代、第三回は、第二次世界大戦の前後）があったと、木原啓治（千葉大教授、環境・都市政策）は、指摘する（『歴史的環境——保存と再生——』岩波新書）。

明治維新後の「廃仏毀釈」や姫路城、彦根城の売却と解体寸前の歴史的事実は、著者が論説している夏目漱石の思想、進歩主義の「影」の問題である（本書「地球人類史への展望」一四頁）。

戦後（第四回）の歴史的環境の破壊が表面化したのは、一九七〇年代後半の高度経済成長政策にともなう「都市化と工業化の波の中で」であった、と木原は指摘する。例えば「飛鳥時代の法隆寺にも比すべき明治時代の代表建築」と評価された「三菱旧一号館」（東京大学名誉教授、日本建築史専攻大田博太郎の発言）が、経済の高度成長の波動によって解体されてしまった（「日本資本主義の起点として重要な意味を持つ記念碑的文化財」と木原によって評価された三菱旧一号館が、高度経済成長の波によって取り壊されたことは、皮肉な現象というほかない）。著者の問題意識に引き付けて言えば、進歩主義は、自然環境のみならず、歴史的環境（例えば建築物、地域の広がりとしての歴史地区（城下町）など）を破壊することとなった。とすれば世界史の方向性（未来像）を進歩主義の思想で決定付けることの危険性（歴史の「影」の問題）を、歴史・環境教育の重要な柱としなければならない、——著者が、本書の中で特に強調しているのは、このことである。その意味

で歴史の方向性を決定するキー・パーソン論は、避けることが出来ない教育の問題でもある、と論評者は、考えている。

四 結語 —— キー・パーソン論の問題

以上異文化論と環境問題を中心に著者の所論を、瞥見してきた。著者の所論の中心となるものは、全てを一元的に説明する進歩主義（「進歩」の図式で近代を考える直線的歴史観）への疑念である。そして独自性（一国の文化や伝統、習俗など）と地域性（東洋、西洋など）を重視しない普遍主義へのアンチ・テーゼが、著者の「タテ」と「ヨコ」の異文化論であり、その文化哲学は、西欧絶対観に対する根本的否定であった。

著者は、「いかに地球を単一文化にするかではなく、多様な文化間の折り合いをどうつける、ということこそが問われ」るとしている（本書三一頁）が、この課題（調和と共存の問題）に答えよとするのが、著者の異文化論（文化相対論）であり、環境世界史観であった。歴史的世界の転換期とか危機的状况に陥ったとき、新しい歴史観が唱えられるとするならば（西村貞二『歴史観とは何か』第三文明社）、自然や歴史的環境の破壊に伴う人類文明の危機を背景に提唱された著者の環境世界史は、批判精神に目覚めた新しい歴史観と言えるのではあるまいか。

このように著者は、人類史を進歩史観（特に啓蒙主義の歴史観）

で捉えることへの疑念から、文明の推移を辿ることによって検討し、人類史は、寧ろ環境破壊史であったとするテーゼを定立する。歴史観が自らの生きる時代に制約されるとすれば、このテーゼは、時代精神といってよい。これは、複眼的歴史観（マックス・ヴェーバー『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』）であってヘーゲルの指摘する一面観（Dogmatismus）の否定である（小論理学）。このことから著者は、ゲシュタルト心理学の重要な概念（図と地 figure and ground）である両義性を身につけることが、教育の最大の課題であると強調しているように考えられる。「偏見」を棄てることを著者が強調していることは、このことである。

ところで論評者は、少年期を過ぎた昭和前期（昭和一〇年代）日本の精神史に関心を寄せている（拙稿「西田書翰に見る日本の精神史」『哲学と教育』第五三号）。昭和前期日本の国家の方向性をキー・パーソン論の哲学・思想（国家論、歴史観）が、正しく決定付けたのであろうか。そのことが、問題であった。周知の通り近代日本は、ヨーロッパ世界を舞台として働く資本制原理を導入して帝国主義段階となり（小松茂夫は、近代化を「資本制原理の世界形成の運動である」総体的展開過程と説明する）近代日本における「伝統」主義——『日本主義』を中心にして——「近代日本思想史講座」7所収筑摩書房）、昭和前期には、国家改造優先

の軍部主導型国家の構築を時代の形成原理として選択し（帝国主義的世界の形成）、戦争への道を歩んだ（戦争は、自然や歴史的環境破壊の最大原因である）。論評者が、歴史の方向付けの鍵を握る、文字どおりのキー・パーソン（国の「かたち」〔国家形態〕の設計者）を重視するのは、これがためである。

キー・パーソン（主体性）—— 価値観・世界観に深く関わる—— が、自然に大きく関与していることは山下正男の言説によって明白である。従って「人間と環境」は、①「人間——働きかけ↓自然（主体性）の側面と、②「自然——働きかけ↓人間（環境性）の側面からなる相互浸透の文化生態系構造となる（宮川喜多二郎「素朴から文明へ」『季刊民族学』一九八四年）。人間と環境の相互限定を、このように論ずることが出来るとすれば、（再三言及しているように）キー・パーソン論は、避けて通ることは出来ない。

本書は、直接環境問題に関わるキー・パーソン論（人物論）に言及してはいない。その意味で一つの残された課題と思うのだが、本書を読み終えてみると、歴史や文化・環境についての絶えざる問題設定と、その教育のあり方（「問い」）を探索し続けている著者—— 具象的に言えば、かけがえのない宇宙船地球号の安全な航海図《自然と歴史的環境の保全》の提言（本書「地球人類史への提言」）と、その思想の原点となるのが歌謡曲「青春の城下町」に象

深草正博著「文化と環境」の教育論（荒井）

徴される土着的な「ふるさと」意識ではないか、とする哲学（問い）を説く著者（本書三五頁、註一〇）—— が、キー・パーソンではあるまいか、そのように思えてならない（西田幾多郎は、軍部が政治的指導権を握っていた昭和前期の時代に、（既に指摘したが）日本国家の「あるべき姿」として個別性を包摂した世界主義を説いている。このことから論評者は、西田を日本のあるべき方向「未来像」を示唆したキー・パーソンと捉えている（未発表稿「西田幾多郎と『世界的世界論』」）。行間に垣間見られる著者の「問い」続ける姿勢を念頭において本書は、読まれるべきである。フイヒテ（G・G・Fichte）の、次の文節文は、そのような著者の姿勢（哲学）をよく表現した言葉だと思う。

人がどういふ哲学を選ぶかは、その人がどういふ人間であるかによつてゐる。といふのは、哲学体系といふものはわれわれの好むままに捨てたり取ったりすることの出来る死んだ家具ではなく、それを持っている人間の心によつて生命を与えられているものであるからである（『知識学への第一序説』）。

皇學館大学 出版部 二〇〇九年刊行（皇學館大学 出版助成書）
二二〇頁 一一二〇〇円（税別）

（あらい まさお・元本学非常勤講師）